

「竹工芸名品展…ニューヨークのアビー・コレクション」—メトロポリタン美術館所蔵

会期：二〇一九年九月十三日～十二月八日 会場：工芸館

竹工芸の現在とその魅力

島崎慶子

二〇一九年五月に大分県立美術館から始まった「竹工芸名品展…ニューヨークのアビー・コレクション」—メトロポリタン美術館所蔵が現在は東京国立近代美術館工芸館に巡回中で、十二月下旬には大阪市立東洋陶磁美術館へと会場を移す。本展は、二〇一七年度にメトロポリタン美術館で好評を博した企画展をもとに、アメリカのコレクターであるアビー夫妻が蒐集した竹工芸作品を中心に構成されている。本展以前に国内を巡回した竹工芸展といえば、二〇〇三年に開催された「竹の造形——ロイド・コッツェン・コレクション展」が挙げられる。一九九九年から二〇〇二年までアメリカ国内

内六都市を巡回した展覧会を日本に持ってきたもので、日本国内では大分市美術館、新潟市美術館、松坂屋美術館、細見美術館、広島県立美術館、日本橋三越の六会場を回り、アメリカの化粧品大手ニュートロジーナ社の社長を務め、テキスタイルの蒐集家でもあったコッツェン氏が四十年以上にわたって蒐集した竹工芸コレクションを紹介した。当時、竹工芸に傾注したアメリカの蒐集家はコッツェン氏をはじめ少数存在したというが、この米六都市巡回展は竹工芸に対するアメリカでの関心を高め、その後、現役作家の個展など作品発表の機会も日本国内よりもアメリカを中心とした欧米に開かれていった。それらが、海外での蒐集を促し、コッツェン展から約二十年を経て今回のアビー・コレクション展へつながったと考えることができるであろう。

竹工の歴史がある大分や栃木を除けば、竹工芸展が国内で開催される機会は限られている。都内の美術館が企画した展示としては二展があるのみで、一九八五年に東京国立近代美術館工芸館で開催された「竹の工芸——近代における展開」以降、二〇一八年に菊池寛実記念智美術館で開催した「線の造形、線の空間——飯塚琢珣齋と田辺竹雲齋でめぐる竹工芸」が三十三年振りであった。そのような状況において、国内を巡回する今回のような規模の展覧会は、海外での注目や活況をもとにこそ開催されると言える。

では、欧米の人々は、竹の造形をどのような視点で鑑賞するのであるのか。日本の文化や古美術への興味、または、素材と造形に感じる東洋的な魅力、他にも、バスケットリーをはじめとしたテキスタイルの見地から、現代美術の方向からなど、当然、切り口は人によって異なるが、欧米には竹が自生しないため、竹を素材とした高度な編組技術による造形物が身近ではない故に魅力があるということは言えそうである。一方、日本人にとって竹素材はあまりに生活に親しく、「寧ろ親しさを通り越して忘れられている場合の方が多し」とは大正から昭和の前半に活躍した竹工芸作家、飯塚琢珣齋の弁であり、竹という素材そのものに特別な価値を見出しにくいのは事実であろう。竹素材の道具は、籠や笊などの日用道具や農業、漁業道具、茶道具などとして多岐にわたって日本人の生活、文化に根差しており、竹工や竹細工への認知度は高い。しかし、そこに伝統の技術のみならず、制作者の創造性までも求める竹工芸の存在は一般的に知られていないとは言えないであろう。

竹工芸の作品は、竹を割り削って加工した多様な「線」を編み、組んで形作られる。竹は中空で真っ直ぐに割り易く、強い反発力を持ったため、竹材の「線」には明快さと勢



長倉健一《花入女(ひと)》2018年
The Abbey Collection, "Promised Gift of Diane and Arthur Abbey to The Metropolitan Museum of Art."
Image© The Metropolitan Museum of Art

いが生じ、造形にはその力感が内包される。制作は竹材の加工から始まるが、竹の選別、加工の仕方と、編み方や造形は緊密に関連し、作家の創意が示されるのである。

竹材の質感や表情は、割り方、材の幅や厚み、面の取り方、節の処理や、染色などの加工によって作られる。現在は染色に化学染料を用いることが多いようであるが、柿渋など自然染料も使い、色彩は、茶褐色から黒褐色を中心に、赤、黄、紫など多様になってきている。また、竹そのものの魅力を作品にダイレクトに反映させようとすれば、染色せずに用いることもあり、細い竹であれば割らずに丸のまま使うこともできるし、自然に変形したユニークな形状をそのまま取り入れることもある。

編組の方法は竹材の性質によって変わる。細かな「編み」は細く薄いひごでなければ難しく、表情豊かな材を活かそうと思えば編みだけでなく、かがつて固定する「組み」で、伸びやかに線を見せるといった方法もある。そして、編組の造形の特徴として、編み目や組み目の連なりが柱や梁となって構造になると同時に、装飾ともなり、部材同士がその力を拮抗させて支え合うため、形状は左右対称になり易く、竹のように反発力の強い材の場合は造形に生じる緊張が大きくなる。また、完成図を想定しながら、構造として無理がなく、且つ見応えのある編組を計画するのであり、そのために必要な材はどのようなものかという考え方もされていく。

仕上げに漆を施すが、それは竹材の保護となり、且つ、竹の表情に深みを与え、砥粉による錆付けを加えれば編組に立体感を生じさせ際立たせる役割も担う。また、取えて漆を施さないことで、竹の野趣を押し出した制作ともなる。

このようにして、素材の魅力を引き出しながら、その性質を反映させた構造物として竹の造形が生み出されるのである。そして、現在では籠形状から用途のない大型の造形作品まで幅広い制作がなされているが、その幅広さは形状にかかわらず竹工芸に用を求めない欧米の需要が、現役作家の作品に対して生じるようになったことも無関係ではないだろう。制作が必要に影響されるのは自然なことであり、需要があるのは良いことである。しかし、一人の作家が年間に作ることでできる竹工芸の大作は多くて四、五点程度であるというから、欧米で求められるほど国内で目にする機会はいくら減り、その認知度も需要も下がっていくことになる。海外からの需要は経済的に作家を支えるが、制作の深化につながっているとは必ずしも言えない現状もあり、国内の空洞化は懸案である。

二〇一九年のミラノ・デザインウィークで、ロエベ（LOEWE）は世界各国の籠に注目し、日本、韓国、アイルランド、南アフリカ出身の作家一〇名に依頼してレザーを編

んだ作品を発表した。竹工芸作家も日本から参加している。このプロジェクトを機にロエベはスペインの編組技術を持つ職人と共同で数種類のレザーバッグを製作したが、編組技術は世界各国にあるとはいえず、そのデザインを見ると日本の竹工芸からの技術に留まらないインスパイアがあったことが想像できる。欧米の視点に立てば、竹工芸は他分野のデザインに転化、流用する対象にもなるということである。竹は日本人の生活に親しい。しかし現代においては、竹材は人工素材に取って代わられ、日本人の生活空間に竹の道具があることの方が稀ではないであろうか。日本人の竹素材に対するイメージや関わり方が更新され、竹工芸の国内での展示、需要が増えることを願う。

（菊池寛実記念智美術館主任学芸員）

参考文献

関島寿子「バスケットリーの定式——かごのかたち自由自在」住まいの図書館出版局、一九八八年。

「飯塚琅玕斎展」図録、栃木県立美術館、一九八九年。

「竹の造形——ロイド・コッツェン・コレクション展」図録、日本経済新聞社、二〇〇三年。

「ミラノ・サローネTOPICS10」PEN「CCCメディアハウス、二〇一九年七月一日発行、一一五頁。

後記 欧米には、複数の個人コレクターたちによる日本の竹工芸コレクションが存在する。それらの多くは、彼らのプライベートな空間を彩った後、海外の美術館に安住の地を得て、今や多くの観衆を惹きつけている。メトロポリタン美術館でのアビー・コレクション展が成功裏に終わって間もなく、二〇一八年からパリのケ・ブランリ美術館で大規模な竹工芸展が開催されたことも記憶に新しい。

島崎氏が「空洞化」と述べるように、「竹工芸名品展」と銘打った本展がアビー・コレクションの日本初公開であるという事実が、竹工芸を取り巻く現状を如実に表している。技法とともに素材選びが制作に大きく影響する工芸分野において、良質な材料の入手が難しくなっていることも課題だが、おそらく竹に対する国内の関心の低下と無関係ではあるまい。本展は、こうした空洞化をすっぱり抜けた「穴」（＝日本）の中にいる私たちが見直すきっかけになるかもしれない。

（工芸課主任研究員 中尾優衣）